

カリタス女子中学校 第二回入学試験

二〇二二年二月一日（午後）実施

国語問題

（五〇分）

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

* 字数の指定がある場合は、句読点や記号をふくむこととします。

一 次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。ただし、④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- | | | |
|------------------|-----------------|-------------------|
| ① 神仏を敬う心を持つ。 | ② バス料金は全区間で均一だ。 | ③ 長い年月を経て完成した。 |
| ④ 私は社長せんぞくの運転手だ。 | ⑤ 彼はおんこうな性格だ。 | ⑥ パーティーにしようたいされる。 |
| ⑦ 田畑をたがやす。 | | |

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

昆虫は、高度な^A本能を発達させています。

しかし、本能には欠点もあります。

トンボが今にも干上がりそうな道路にできた水たまりに卵を産んでいることがあります。こんなところに卵を産めば、幼虫は育つことなく干上がってしまうように思えますが、トンボは平気で卵を産みます。

水面と間違えてしまっているのでしょうか。

①、ブルーシートの上に卵を産んでいることさえあります。

トンボは遠くから小さな虫を獲物として捉える^①視力を持っています。そこが卵を産むべき場所でないことは、空の上から見ればわかりそうなものです。しかし、おそらくは、「地上で陽の光をキラキラと反射させているところに卵を産む」とプログラムされているのでしょう。その本能に従って卵を産んでしまうのです。おそらく、アスファルトやブルーシートがない時代には、そのプログラムでよかったでしょう。

②、そのプログラムは、今の都会ではとても適合しないものになってしまいました。

それでも、トンボたちは、今では通用しなくなってしまったそのプログラムに従って、正しくない場所に卵を産んでしまうのです。狩人バチの仲間^{かりやし}は、他の昆虫などを獲物として捕らえると、巣に持ち帰って幼虫のエサにします。ところが、エサを巣に持ち帰る途中で落としてしまっても、探そうともせずに、そのまま巣まで飛んで帰ります。また、太陽の光で自分の位置を判断する昆虫たちは、暗闇^{くらやみ}に輝く電灯に向かって突進^{とっしん}してしまいます。

本能のプログラムに沿って機械的に動くために、誤った行動をしてしまうのです。

これが本能の欠点です。

決まった環境^{かんきよう}であれば、正しく行動をすることができます。ところが、プログラムの想定外の環境の変化にはまったく対応できないのです。

それでは、どうすればよいのでしょうか。

昆虫が本能を高度に発達させたのに対して、生きるための手段として知能を高度に発達させたのが、私たち人間を含む哺乳類^{ほにゅうるい}です。

哺乳類は、自分の頭で考え、どんな環境に対しても臨機応変に行動することができます。情報を処理して、状況を解析し、とるべき行動を導き出す。これこそが、知能のなせる業です。

知能を持つ哺乳動物は、ブルーシートに卵を産んでいるトンボの行動が正しくないことはすぐにわかりますし、落としてしまったエサは、その場で探します。

これが知能の優れたところです。

ところが、知能にも欠点があります。

長い進化の過程で身につけた「本能」は、多くの場合、正しい行動を導くマニュアルです。

3

解答が示されているのです。

一方の「知能」は、自分で解答を導かなければなりません。自分の頭で考えた行動が正しい答えであるとは限りません。考え抜いた挙げて、行動を誤ってしまうこともあるのです。

それでは、知能が間違った行動を起こさないためには、どのようにすればよいのでしょうか。

状況を分析するためには、データが必要です。最近では、AI（人工知能）の発達がめざましく、コンピューターが人間に勝つことは不可能と言われた囲碁や将棋の世界でも、人間を簡単に打ち負かすほどになってしまいました。

このAIが行うのが「ディープラーニング」です。

たとえば、囲碁や将棋が強くなるためには、たくさん情報が必要です。

まずは、囲碁や将棋のルールをコンピューターに教えます。次に囲碁や将棋の本に書いてあるような定石や定跡をインプットしていくことでしょう。しかし、これだけでは人間よりも、強くなることはできません。

そこで、過去の対局の膨大なデータをコンピューターにインプットしていきます。こうして、「この場面ではこうすれば勝てる」「この場面でこうしては勝てない」というたくさんの情報を学んでいくのです。

しかし、「人間から教わる」という作業を繰り返して人間の知識を詰め込んだだけでは、人間を超えて強くなることはできません。

そこで、やがてコンピューターは、自分自身の中で囲碁や将棋の対局を繰り返していきます。そして自ら勝ち筋を学び取っていきます。つまり、「機械が自分で学ぶ」という作業をするのです。これが「ディープラーニング」です。

コンピューターはものすごいスピードで対局を繰り返すことができます。そして、膨大な情報を得ていきます。こうなると、もはや人

間では太刀打ちすることができません。

こうして、人間を打ち負かすようなAIが育て上げられるのです。

哺乳動物の知能も同じです。

正しい答えを導くためには、膨大な情報が必要です。しかし、外部から与えられた情報だけでは不十分です。その情報を頼りに、自身で繰り返し、その情報の確かさを確認していきます。

これが「経験」です。

何もインプットされていないコンピューターはただの箱であるのと同じように、何の情報も持たない知能は、まったく機能することがありません。

私たちには、経験が必要なのです。

AIの問題として古くから取り上げられるものに、「フレイム問題」があります。D
フレイム問題は、ロボットのたとえ話で説明されます。洞窟の中にロボットを動かすバッテリーがあり、その上には時限爆弾があります。ここでロボットに「洞窟に入り、バッテリーを持つてこい」と指示を与えます。

一号機は、洞窟の中からバッテリーを持ち出しましたが、いっしょに爆弾も運び出してしまったために、爆発してしまいました。

「 I 」のです。

そこで二号機には、「バッテリーを持ち出すことに付随して起こることに考慮する」という条件が加えられました。ところが、二号機はバッテリーの前で止まってしまいました。爆弾を取り除くと天井が落ちてしまわないか、壁に近づくとき壁の色が変わってしまわないか、と起こりえないような状況まで次々に考慮して、何もできなくなってしまったのです。

そこで、三号機には、「箱からバッテリーを取り出す」という目的に無関係なことは考慮しないという条件を与えました。すると、三号機は洞窟に入ることさえできなくなりました。「 II 」のです。

人間であれば、危険な爆弾を取り外し、バッテリーだけを持つてくることは、容易に思いつきます。しかしAIは、「爆弾を取り外す」という指示されていないことに思っていることができなかったのです。

4、「洞窟の中からバッテリーを持つてくる」というこのロボットの話は、AIの研究の初期段階で提示された問題であり、爆弾

を回避しながらバッテリーを持つてくるということは、今ではAIにも可能になったようです。

ただし、想定外のことに対して、適切に対応することが難しいという本質的な課題が完全に解決されたわけではありません。条件やシチュエーションをしぼり込むことでフレーム問題は解決されますが、すべての問題を解決するためには、膨大な情報を入力する必要があります。

人間の「経験」は、そのAIの情報量を上回るのです。

想定外に対応できるのが、人間の強みです。もし、「想定外」と簡単に言っただけで機能停止してしまうような人間がいるのであれば、初期のAIと何ら変わりません。

経験とは、「成功」と「失敗」を繰り返すことです。

囲碁や将棋のAIであれば、「こうしたから勝った」「こうしたから負けた」という情報を蓄積していきます。

哺乳動物も同じです。成功と失敗を繰り返すことで、どうすれば成功するのか、どうしたら失敗するのかを認識していきます。それが経験です。

しかし、哺乳動物にとっての経験には条件があります。その経験が安全なものであることです。そうでなければ、私たちは命を失ってしまうのです。

「二度、ライオンに食べられてみた」「高いビルから飛び降りてみた」という経験は、私たちの生存にとって役に立つ情報を与えてくれません。死んでしまったら、終わりだからです。

そのため経験は、安全が保証された環境で行われる必要があります。

哺乳動物は、親が子どもを守ってくれます。そのため、子どもたちは、親に守られて経験を積み重ねることができます。

親の保護のない昆虫は経験を積むことができません。一方、哺乳動物は親の保護があります。親が守ってくれることによって、哺乳動物は経験を活かすことが可能になり、知能を高度に発達させることが可能になったのです。

哺乳動物の親の役割は、子どもを守ることだけではありません。安全な環境で経験を積ませることもまた、哺乳動物の親の役割なのです。

それでは、親の保護下で、子どもたちはどのような体験をすることができるのでしょうか。

哺乳動物の子どもたちは、限られた環境下で、効果的に体験を積み重ねるツールを持っています。

それが、「遊び」^Eです。

とにかく哺乳動物の子どもたちは、よく遊びます。キツネやライオンなど肉食動物の子どもたちは、小動物を追いかけます。あるいは、兄弟でじゃれ合ったり、ケンカしたりします。

こうした遊びは、「狩り」や「戦い」や「交尾」などの練習になっていきます。遊びながら、成功と失敗を繰り返し、獲物を捕る方法や、仲間との接し方を学んでいきます。

そして、安全な環境のもとで危険を学ぶということが大切です。

親が保護してくれていれば危険は回避されます。親に保護されている子どものうちは、失敗したからといって命にかかわることはありません。しかし、独り立ちすれば、まわりは危険だらけです。何が危険で、何が危険でないかを、安全な環境で体験しておくことが必要なのです。

〈稲垣栄洋『生き物が大人になるまで「成長」をめぐる生物学』（大和書房）より〉

〔語注〕

※ 定石^{じようせき}や定跡^{じようせき}……囲碁^{いご}や将棋^{しょうぎ}で、過去の戦いの研究から導き出された最も良いと考えられる石や駒の動かし方のこと。

囲碁では「定石」、将棋では「定跡」と書く。

問一

1 4 にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア つまり イ しかし ウ さて エ それどころか オ もっとも

問二

A 本能 とありますが、筆者は文中で、昆虫の「本能」をどのような言葉で言いかえていますか。答えとしてふさわしい言葉を二つ、本文中からそれぞれ五字以内でぬき出して答えなさい。

問三

① 視力、② 適合 と漢字二字の構成（組み立て方）が同じ熟語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア 豊富 イ 善悪 ウ 国営 エ 国語 オ 防災

問四

B 正しくない場所に卵を産んでしまう とありますが、トンボが現代の都会で「正しくない」行動をしてしまうのは、その背景としてどのようなことが起きているからですか。本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

問五

C 生きるための手段として知能を高度に発達させたのが、私たち人間を含む哺乳類です。とありますが、「知能」のマイナス面について筆者が述べていることを、本文中の言葉を使ってまとめなさい。

問六

D フレーム問題は、ロボットのたとえ話で説明されます。とありますが、これについて次の(1)(2)に答えなさい。

(1) 「ロボットのたとえ話」の「Ⅰ」「Ⅱ」に当てはまるものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度ずつしか用いないこととします。

ア 周辺の自然環境に及ぼす影響を重要視することで、自分の行動を必要以上におさえ込んでしまった

イ 爆弾の危険性に気づくことはできたが、一刻も早く指示を達成することが優先だと判断してしまった

ウ バッテリーを持ってこいという指示は達成したものの、それ以外のことを考えることができなかった

エ 洞窟に入ることとバッテリーには直接の関係性がないので、事前の指示のとおり、洞窟の外で停止してしまった

オ 目的に対して無関係なことは無限にあるので、それを探し出して取り除くのに、無限の時間を必要としてしまった

(2) 筆者はこのたとえ話でどのようなことを説明しようとしていますか。もつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間はAIが処理する以上の、膨大な情報を処理していること。

イ 人間の科学技術の力で、ロボットが少しずつでも進歩していること。

ウ 人間の経験が、AIの急速な進歩に大きな役割を果たしてきたこと。

エ 人間と同様にAIも、今では完全にフレーム問題を解決できていること。

オ 人間はAIに頼るのではなく、人間が本来もつ特性をのばすべきであること。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。※のついた言葉には、文章の最後に注をつけてあります。

梨乃^{りの}は東日本大震災^{だいしんさい}で被災^{ひさい}し、三年前に埼玉県に引っ越^こしてきた。転校した中学ではクラスメイトの「紅実^{くみ}」の言動が梨乃の心を波立たせた。高校に入学してすぐ、社交的な「美湖^{みこ}」やクラブが同じ「陶子^{とうこ}」と知り合うが、梨乃の中にはふたりと少し距離^{きょり}を置きたい気持ち^{きもち}が芽生えつつあった。

梨乃が、今の家に引っ越してきたのは、三年近く前の夏だった。父の転勤がきっかけだ。

新しい中学には、夏休み明けの九月から通った。梨乃にすれば、転校理由をあえて話そうとは思わなかったが、クラスの生徒たちは、すでに事情を知っていた。

梨乃は今も、忘れることができない。席を指定されて、紅実の隣^{となり}に座った時に、最初に言われた言葉を。

「大変だったんだね。津波^{つなみ}で家がだめになってしまったんでしょ？ あたしたち、宮城から被災した人が来るって聞いた時、クラスで話し合って決めたんだよ。みんなで、岩井さんのこと、応援しようって。この学校のことは、なんでも聞いてね」

そして梨乃は、この時から、新しい学校で、かわいそうな被災者になった。

クラスの大半の子は、近隣^{きんりん}の二つの小学校からの進学で、二期ともなれば、クラス内の人間関係はすっかりできあがっている。そんな中に入っていくだけでも、ストレスなのだ。……………①

できれば、父の転勤ということだけにしかかったが、隠^{かく}し通せるものでもないから、クラスメイトに事情が伝わっていたことを、驚^{おどろ}いたり恨^{うら}めしく思ったりしたわけではない。ただ事実を淡々^{たんたん}と受け入れてほしかった。しかし、それは、
A 紅実の言葉で、最初から躓^{つまず}いた形になった。

紅実^{こうみ}は、髪を三つ編みにした、くりっとした目の持ち主で、笑うと左の頬^ほにだけえくぼができる。はきはきとした物言いと愛嬌^{あいぎょう}のある豊かな表情で、女子のリーダー的な存在だった。音楽が好きで、部活は吹奏楽部^{すいそうがくぶ}でクラリネットを吹^ふいているという。そんなことを、尋^{たず}ねる前に梨乃に告げた。

吹奏楽部でクラリネットを担当していることは、紅実^{こうみ}になんの罪もない。だが、ほんの一瞬^{いっしゆん}、それは
B 自分^うにとって奪^{うば}われた夢なのだ

と思ってしまった。

高校生活の二日目に、陶子がクラリネットをやっていたと聞いた時も、心にひっかかりを覚えた。けれどそれは、自分が望みながら、できなかったことを陶子がやっていたからではない。……………②

小学生の六年生ぐらいから、中学に入学したら、吹奏楽部に入ると、ずっと思っていた。けれど、通常より半月以上遅れて入学した中学校で、部活をやる余裕はなかった。とてもそんな気持ちになれなかった。……………③

故郷の中学には、避難所になっていた小学校から通った。梨乃の家は、流されてしまったわけではなかったが、一階の天井までが水につかり、傾いてしまったために、たとえ水が引いても、そのまま住むことができなかったのだ。

運よく五月の下旬には仮設住宅に移ることができたが、四畳半が二間とキッチンプレハブ住宅で、部屋数は前の家の半分もないし、壁が薄くて隣の物音がよく聞こえた。それが母を苦しめた。それでも、まだしもあの頃の方が、母も気が張っていたようにも思う。

やがて、夏を前に水産加工の会社で働いていた父親が東京の本社へ転勤となり、八月に今のところに越してきた。

三月十一日の大地震の日は、梨乃と母は、高台で一夜を明かした。そこから見下ろす街は真っ暗で、自分の家がどのあたりなのかさえ、見当がつかなかった。父が勤めていた会社はかなりの被害を受けたが、父も他の社員たちも無事だと翌日には確認できた。

しかし、中学生だった兄の消息がわからなくなった。

兄の貴樹が見つかったのは、五日後のことだった。確認に出向いたのは両親で、梨乃が兄と対面したのは、葬儀の時だった。棺に作られた小窓から見た顔は兄の顔に間違いなく、それなのに、どこか現実ではないような気がして、梨乃は涙を流すこともなく見つめていた。あるいは、母の嘆息があまりに激しくて、泣くことができなくなってしまったのだろうか。

戸田に越してきてしばらくの間、梨乃は病気がちの母を助けて、家事をこなした。結局、故郷から遠く離れた地に落ち着いてからも、部活どころではなかったのだ。慣れない土地で暮らすことや、気づころの知れた友もない不安、折に触れてよみがえるあの日のこと、

津波に襲われる夢……。

大津波の警報に追われるように、高台に逃げたあの日。

C

寄せるどす黒い水が、思いもかけぬ速さで家や車を飲み込んでいく。

車が家につかかっていくさまに息を飲んだ時、ふいに何も見えなくなる。視界をさえぎるように、母が梨乃を抱きしめていた。梨乃は母

にしがみついたまま震えていた。あの時の、なんとも言いようのない空気や臭いの記憶は、身体にからみつくように長く残った。故郷から遠く離れた転校先の学校を初めて訪れた日、教室の生徒たちを見回しながら、自分が体験し、感じたことは、このだれにもわからない、わかるわけがないと梨乃は思った。わかつてほしいとも思わない。ただ、ふつうにしてほしかった。

それを紅実が妨げた。善意によって。

一年、二年と同じクラスだった紅実は、最も梨乃に親切にしてくれた生徒でもあった。紅実のおかげで、孤立しませんでした。けれども紅実の示す心遣いが苦しかった。 ④

「東北の人って、辛抱強いよね。避難所での秩序、世界中から絶賛されたもの」

そう紅実が口にしたのは、いつだったろう。梨乃は曖昧に笑った。でも、心の中に、もやもやとした思いがひろがっていく。そんなじゃない。そんなものじゃなかった。あの頃の梨乃は、現実感を失ったまま、ただ時間がすぎるのに身を任せていた。与えられたものを食べ眠る。眠れなかったり寒かったりしたはずなのに、その記憶が希薄だった。見知った顔も多かったから、互いに気遣いながらも、だれもがまだ混乱の中にいて、そんな中でだれかの死が確定していく。それが十二歳だった梨乃が覚えている避難所の景色だった。

「絆ってほんとに大事だよね」

それは、紅実の言葉ではなかったのかもしれない。やたら、絆という言葉が流行った年だったから。でも、梨乃は、絆という言葉が、どうしても好きになれなかった。その時も、その言葉は嫌いだと言ってしまいそうになる自分を抑えた。

三年で紅実とクラスが別れて、ほっとした。無論、そのときのクラスメイトも、梨乃が宮城から越してきたことを知ってはいたけれど。 ⑤

三年の二学期になってから、梨乃は、念頭にあった県立の高校から志望校を変更した。変えた理由の一つが、紅実がそこを目指しているらしいと聞いたことだった。そして、最終的には、だれも進学する者のいない学校がいいと考えるようになり、緑野を選んだ。もう三年もたったのだからとは思ったが、やはり震災で被害に遭った者という目で見られたくはなかった。

なぜ、紅実が苦手だったのだろう。やさしい子なのに。人気者なのに。自分の心が狭いのではないかと悩んだこともあった。そんなものろもろの感情を内に隠して、梨乃は物静かで落ち着いた生徒として中学生生活をやり過ごした。

あの頃は、学校だけでなく、家にいてもなかなか心が晴れなかった。転勤先で必死に働く父は、以前よりも帰宅が遅くなった。父は

仕事に逃げていたのかもしれないと、今は思う。

梨乃は、家の中でほとんど母と二人で過ごすことになった。その母は、毎月の十一日には必ず眠れなくなり、体調を崩した。母は、兄の不在がどうしても耐えがたかったのだ。

引越してきたばかりの頃は、そんな母と何度か諍いをした。こっちの生活に慣れなければいけないのだからという梨乃に、感情的になった母は、

「梨乃は貴樹のこと、忘れちゃったの？ あんたがそんなに冷たい子だったなんて」

という言葉を投稿つけた。それを聞いた梨乃の心は凍りついた。そう、自分は冷たいと思った。母の言葉で冷えたのだ……。それなら、わたしが死んだ方がよかったの？ と、そんな言葉を投げ返したかった。それを、すんでのところで飲み込んだのは、一度や二度ではなかった。けれども、引越してきて半年たった頃から、梨乃は母を刺激しないようにしようと思うようになった。家事もできるだけ手伝うようにした。抗えば、かえって自分が傷つくことになる。だったら、自分が我慢すればいいのだ。生き残ってしまったのは、梨乃の方なのだから。

学校では、ふつうに振る舞うことを奪われて、同情を寄せられ続けていた。そのことで十分に気持ちがざわつくのだから、せめて家中では、心静かに過ごしたかった。

もしも、兄が生きていたら、兄といろんなことを話したら、被災したとしてもどれだけ救われたろう。何もわかってなくせに、簡単に同情なんかしてほしくない——そんな風に毒づいても、兄ならば、柔らかに受け止めてくれただろう。

いや、そもそも、兄がいたならば、母はあんな風にはならなかった。

震災から一年ほど経った頃から、母は編み物を始めた。主には細いレースの糸を使ったかぎ針編みで、

「針を動かしていると、あれこれよいけいなことを考えないですむのよ」

と、気弱な笑みを浮かべる。そうして、家の中に、母の編んだ小物が増えていく。テーブルセンターやテレビカバー、花瓶敷き、コースター……。なぜか、身につけるものは編もうとしなかった。

三年の二学期に、梨乃は受験する学校を、親に相談することなく自分で決めた。梨乃の一家は、津波でだめになった家と、今住んでい

る中古マンションとの二重ローンを抱えていたので、東京の私立高校に進学したいと告げた時、母はしぶったが、最後には父が認めてくれた。

「震災で越してきたことを、だれも H 学校に行きたい」

と、梨乃は母のいないところで告げた。

「そうか。……すまん」

ぼつりと父はつぶやいた。なんに對して謝っているの？ その問いを梨乃は飲み込んだ。だれのせいでもないのだ。兄が亡くなったことも、家を失ったことも、母の気持ちがふさいでいることも。

梨乃は自分からは美湖に近づかないようにした。そんな自分を、心が狭いと思った。

〈濱野京子『この川のもこうに君がいる』（理論社）より〉

〔語注〕

※ 戸田……………埼玉県戸田市。梨乃の住んでいる場所。

※ 避難所^{ひなんじょ}での秩序……………大人数での苦しい避難所での生活が秩序だったものであったことが知られている。

※ 緑野……………私立緑野学園高校。梨乃の入学した高校。

※ 十一日……………東日本大震災の起きた三月十一日の十一日。

※ 諍^{いさか}い……………言い争い。

※ 抗^{あらが}えば……………反抗^{はんこう}すれば。

問一 A
紅実の言葉で、最初から躓いた形になった。とありますが、ここでの「躓く」とは「障害を感じて予定通り進めなくなる」というような意味です。「梨乃」は「紅実の言葉」に表れた、自分に対するどのような見方を障害と感じたのでしょうか。自分の言葉で答えなさい。

問二 B
自分にとって奪われた夢なのだ とありますが、これについて次の(1)(2)に答えなさい。

- (1) ここでの「夢」とは具体的にはどのようなことを指しているのですか。二十字程度で答えなさい。
(2) 「夢」は何によって奪われたのですか。二十字程度で答えなさい。

問三
次の一文はある形式段落の最後に入っていたものです。どこに戻せばよいでしょうか。……①～⑤からもっともふさわしい場所を選び、数字で答えなさい。

紅実のことが頭をよぎったためだ。

問四 C に入る言葉としてもっともふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、記号を書きなさい。

- ア しんしんと イ ひたひたと ウ ゆったりと エ どんよりと オ ひしひしと

問五 D 梨乃は曖昧に笑った。でも、心の中にもやもやとした思いがひろがっていく。とありますが、これについて次の(1)(2)に答えな

さい。

(1) 「曖昧に笑った」梨乃の気持ちを説明しているものとしてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号を書きなさい。

ア 「紅実」の言っていることの意味がわからなかったが、それを「紅実」に悟られまいととりあえず笑っている。

イ 「紅実」の言葉は善意からくるものかもしれないと思い、その気持ちにこたえようと無理に笑顔を作っている。

ウ 「紅実」の言葉があまりにも見当はずれであったため、こっけいに思えて笑いをこらえきれなかった。

エ 「紅実」の言葉に強く反発し怒りを覚える反面、自分の立場を守る必要も感じて笑顔で対応する努力をしている。

オ 「紅実」の言葉を素直に受け取ることができない自分の根性にほとほと嫌気がさし、自身を冷笑している。

(2) 「もやもやとした思いが広がっていく」とありますが、この気持ちの根底にある「梨乃」の思いを述べた部分を「――D」より前のところから三十字～三十五字でぬき出して答えなさい。「という思い」に続く形でぬき出すこと。

問六 E やり過ぎた。とありますが、ただの「過ぎす」ではない「やり過ぎす」という表現にはどのような意味が含まれていますか。答えなさい。

問七 F 父は仕事に逃げていたのかもしれない。とありますが、父は仕事に打ち込むことで何から逃げていたと考えられますか。答えなさい。

問八 G なぜか、身につけるものは編もうとしなかった。とありますが、なぜだとあなたは思いますか。理由を考えて書きなさい。

問九 H に入れるのにふさわしい言葉を前後から判断して考え、答えなさい。字数は四字とします。

国語の問題はこれで終わりです。

